



## 阿蘇山の爆発

### 有史以来未曾有の大惨事

最近伊豆大島・明神礁と東日本の活潑な火山活動に対応するかのようになり、4月27日11時31分、突如として阿蘇が噴火し、修学旅行で登山中の高校生など死亡5、重傷14、軽傷50数名に達する同火山有史以来未曾有の惨事を惹起した。

じうらい阿蘇の噴火は、阿蘇五岳の1つ中岳の噴火口に限られていた。その噴火口は数個の火口が南北に連なり、全体として南北1,100m、東西400mの、いわゆる複合火口となっており、それらの火口が交互に繰返して活動してきたのであるが、今回爆発した第1火口はその最北端に当たっている。

記録に残っている中岳最古の噴火は、貞観9年(867)で、以後今日まで何回も活動を繰返しており、その休止期に当たっても噴煙、噴気の絶えたことなく、東の浅間山とともに代表的活火山として、これがまた観光の最大の焦点となっている。

その噴火の様式は典型的なストロンボリ式(多量のガスと火山弾——熔岩の半固体状態のもの——が間歇的に爆発逸出される状態)で、有史以来熔岩の流出は全然認められない。4月27日の爆発に引続き、28、29両日と5月4日にも爆発し、その後もなお活況を呈しているが、しかし古来枚挙にいとまないほど噴火を繰返しながら、「よな」(火山灰の方言)による家畜・農作物の被害以外、噴石などによる直接の人畜に與えた被害はほとんどなく、過去にあつて人命の失われたのはわずかに文明6年(1485)の噴火のときの1名だけで、噴石を数百mの高さにまで抛出した昭和8年(1933)2月24日の爆発でも人畜に被害は全く無かつた。

今回の噴火は昨年8月の小噴火以来のものであ

つて、同火山としては決してとくに大規模のものというわけではなかつたが不幸にも観光客が火口底にあふれていたために、惨事を招いたのである。

現在阿蘇山には中央气象台の測候所と、京大の火山研究所とがあつて、測候所では現在石本式450倍地震計による微動観測・火山性地震に重点をおき、過去長年の研究により、噴火予知の問題にもすでに明い見通しがついており、その観測結果から災害を予防し得たこともすでに数回におよんでいる。

しかし残念ながら今回の噴火は、その前微である火山性微動が著しく微弱で、従来経験した例に徴しても、爆発を予想し得られるものではなかつた。

ところで阿蘇山は、浅間山とともにこの方面の研究が最も進んで

いる火山であるが、今回の爆発の例にかんがみても、この際画期的にその測器施設の整備充実することを声を大きくして叫びたい。現況は余りにもみすぼらしく観測者の努力の割合に報われることが少ない。たとえば測候所への電燈線の引込みからしてまず取りかからなければならない状態である。中央气象台でも熊本縣でも目下その実現に鋭意努力はしているが、この誇るべき日本の観光資源の安全を期するためにも、大方の御支援をお願いいたす次第である。

なお福岡管区气象台では、九大の協力を得て、物理探査法により、震源の深さおよびその動きと火山性微動との関係、火口附近の地下構造などについて、詳しい調査を進めている。

(中央气象台訪談幹技官の厚意により提供を受けた料資から要約)  
(地質部)

